

宝は待っている

[マタイによる福音書 11章 2～19節]

「イエスは十二人の弟子に指図を与え終わると、そこを去り、方々の町で教え、宣教された。ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言うておく。預言者以上の者である。

『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの前に道を準備させよう』と書いてあるのは、この人のことだ。はっきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている。すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。あなたがたが認めようとするれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである。耳のある者は聞きなさい。今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。『笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、悲しんでくれなかった。』

ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。」

[1] 「伝道」って何だろう

私たちは「イエス様のことを伝える」と言いますがけれども、それが簡単なことではないという気持ちをいつも抱いていると思います。「伝道」の難しさですね。よく「信仰の継承」などと言われますよね。けれども私も本当にそのことには難しさを覚えます。出来ていないなあと言わざるを得ません。しかし一方ではまた思うのです。こればかりは何か算数の九九とか数式を覚えるようなこととは

違って、その人の心の一番深い問題なのだから押し付けるようなこととは違うだろう、もしそれで信仰告白をしてもそれはうわべだけの信仰ということになってしまうだろう、私たちが伝道において出来ることは、きっかけを与えることは出来るかもしれませんが、あとは**その人と神様との関係の問題**ですよね。人間の知恵とか言葉などを超えたことだと思うのです。ですから、私たちは「祈り」が大事なのだと思います。神様がその方の心に触れて下さるように、その方が自分で神様と出会い、その喜びに満たされますように、と私たちは聖霊の導きを祈ります。それが、私たちが出来る「伝道」なのではないかなと思います。

[2] 「来るべき方はあなたですか」

今日の聖書の箇所（マタイ 11 章 2 節以下）ですが、迫害され牢の中にいる洗礼者ヨハネは、イエス様の所に自分の弟子を送り、このように尋ねさせたと記されています。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」—これに対してイエス様の答えは、答えとは言えないような言葉でした。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」—イエス様は「私がメシア・救い主だ」と言うことはおっしゃいませんでした。そうではなく、あなたが見聞きしている事実だけを語るがよいと、そのことを初めから偏見を持たずに素直な心で受け止めて欲しいと、おっしゃっているのではないかと思います。

言い換えれば、イエス様は「待っていらっしゃる」のではないのでしょうか。私たちの方からイエス様を見出すことをです。イエス様というお方は、「**出会われる**」のを待っているお方だと思います。決して押しつけがましくないのです。「イエス様はあなたの罪からの救い主だから信じなさい。そうでないと滅びますよ」というのは伝道ではないと私は思います。それは殆ど脅迫に近い、その方の意志を無視したもので、信じる喜びも幸いもないですよ。「信仰は喜びだ」と言う時、それは「宝の発見」ということと似ていると思います。マタイに福音書の少し後、13 章にはこのようなイエス様のたとえ話が書かれています。13:44 以下です。

「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠の一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。」—ここにあるのは、**望外の喜び**ですね。宝くじに当たる以上 (!) のことです。自分の持ち物

すべてを売りはらってもそれを手に出来たことが嬉しい、というものと出会えた！ という**爆発する喜び**がここにはありますね。イエス様の福音というものはそういう性質のものなんだ、「キリスト教とはこういう宗教です」というような、文字で説明できるようなものとは違うということを語っていると思うのです。

[3] 自分で見出すことが人生の役目

社会学者の橋爪大三郎氏が『**死の講義—死んだらどうなるか、自分で決めなさい**』（ダイヤモンド社）という本を書かれ、よく売れているそうです。橋爪さんは「宗教」を俯瞰する学者ですけれども、本の紹介も兼ね、新聞にこのように書かれていました。—「科学と合理主義の時代でも科学でこの世界すべてを割り切って考えることは出来ない。社会の成り立ちや人間の生きる意味、価値を掴み取るには、科学の枠をはみ出さなければならない。宗教は、死と向き合う人間をアシストし、生き方をサポートしてくれる。ただし、それが宗教である必要はない（丸山注・橋爪氏はクリスチャンではありません）。よりよく生きるために死を考える。この社会と人生のあり方をみつめる。自分なりの生き方のスタイルを選び取る。それを一人ひとりがやってみよう。世界にたった一人しかいないわたしの充実を、見つけ出すのはわたしの役目だ。それは人間として生まれたわたしの、自分への義務ではないだろうか。人間はいずれ死ぬ。あなたもわたしも。死の前のまだ元気なうちに、自分が死ぬとはどういうものか見つめ直してみませんか。この本はそうした本です」と。この言葉が特に心に残りました。—「**世界にたった一人しかいないわたしの充実を、見つけ出すのはわたしの役目だ。それは人間として生まれたわたしの、自分への義務ではないだろうか。**」

洗礼者ヨハネも自分の死というものをきっと感じていたのだと思います。実際次に登場する場面（マタイ 14 章）では彼はヘロデの手によって殺されてしまいます。洗礼者ヨハネはメシアの先駆者と言われます。そして、女から生まれた最高の人物であるとさえイエス様から言われています。けれども、彼自身もまたメシア・救い主が必要なのですよね。人間ですから。だから答えを知りたかった。「**来るべき方は、あなたでしょうか**」。でも、私たちに求められることは、誰かに答えを教えてもらうことではなく、**自分がイエス・キリストと向かい合うこと**なのです！

[4] 十字架の救いという究極の宝

私は時々思い出すのですけれども、私が FEBC で正社員として働いていた時、もう召された前の前の FEBC の代表がスタッフ祈祷会でこんなことを語られていたことを思い出します。それは、「信仰とは、極めて個人的な神様との関係です。それは**<秘め事>**と言ってもいい。イエス様との出会いは、秘め事です。」

自分だけの「宝」です。それは客観的なことではなくて、キリスト教という宗教の教義でもなくて、「出会ってしまう」という宝です。聖書を読むということは、祈るということは、その**宝の金脈を自分で見出すこと**です」と。本当にそうなのだなあとこの頃よく思います。この宝は、**私たちが来るのを待っている**のですね。

その**宝であるイエス様**と出会う時に大事なことがあると思います。前代表の小林さんも良くおっしゃっていました。それは神様の前に自分をさらけ出すこと、裸になることだと。今日の交読文で読んだ詩編の言葉がそれです。51編4～5節です。—「わたしの咎をことごとく洗い 罪から清めてください。あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。」ダビデの祈りですが、私たちの祈りですね。そこには誰も入る余地はありません。私と神様の一対一。“秘め事”です。この祈りの19節にこうありましたね。—「しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を 神よ、あなたは侮られません。」—神様は、**私たちの罪の告白を侮られないお方**だと。何と幸いなことでしょうか！これが「宝」ですね。そして私たちは知っているではないですか。主は、**私たちの罪のために、そのいのちを献げて下さった**ことを。ここに私たちの「死」の解決もあるのです。**罪の赦し**です。永遠の生命です。橋爪さんは、「自分で決めよう」と言いますが、究極的なことは神様の方から来るのです。神様が、イエス様にあって、救を成し遂げて下さったのです。私たちはそのイエス様と出会うように、自分をこの方の前にさらけ出す。その時に、**十字架の救い**という宝が自分のものになるなだと思います。

今、ニュースを見ると「ワクチン」がまるでこの時代の福音であるかのような印象さえも受けます。けれど、私たちの救いは「ワクチン」じゃないですよ。しかも、このワクチンも何度も受ける必要があるなんて言われていますけれども、それでも人は最後は死ぬのです。「死」を超えた希望を、生きている内に与えられなければ不安は消えませんよね。それが**十字架の福音**です。イエス様が、この私を本当に愛して下さっているその神様の証しが、十字架です。このイエス様に、私たち、この朝もう一度、素直な心、裸の心になって出会いたいと思います。主イエス様はおっしゃいました。—「わたしにつまずかない人は幸いである」。

お祈り致します。